

## 付録A 付録

### A・1 キャプテンの時代

岩波書店から発売されている『少年ジャンプ』の時代 子どもと教育（斎藤次郎著）<sup>1</sup>という本にはキャプテンが連載された少年ジャンプについての歴史をまとめている。この文は「キャプテン」が描かれた当時の時代背景やあきおさんの先駆的発想にふれることができると思います。この本の中のキャプテンについての文を参考までにのせておきたいと思います。以下は本文からの抜粋である。

#### A・1・1 野球漫画の系譜

（中略）

新幹線、東京オリンピックに象徴される経済の高度成長期で、「根性」だしてがんばれば必ず報われると信じられた時代である。「巨人の星」は六十八年からテレビ・アニメ化してヒットする。以後、「タイガーマスク」（プロレス）、「アタックナンバー1」（バレーボール）、「あしたのジョー」（ボクシング）などのアニメや、「柔道一直線」（柔道）、「サインはV」（バレーボール）といった実写ものなど、テレビでは雑誌漫画を原作としたいわゆるスポーツ根性路線が人気を集める。

スポーツ根性路線ということばは、テレビの「巨人の星」の主題歌の「思いこんだら試練の道を、行くが男のご根性」に由来している。単にスポーツものというのと、スポーツ根性ものというのと、ちよつとした違いがある。スポーツの世界に生きるヒーローの活躍を、それぞれのスポーツ固有のおもしろさで味つけした程度なら、それはスポーツもので、スポ根になると、悲劇的なまでに、「試練の道」の苦行が描かれなければならない。

（中略）

スポーツ漫画は行き着くべきところに行き着いてしまったのだ、とぼくは「巨人の星」や「あしたのジョー」の連載が終った『少年マガジン』を眺めながら思っていたのだ。ところが、それがそうではなかったのである。『少年ジャンプ』から、脱スポ根ともいうべき、不思議な野球漫画が現れるのだ。『少年ジャンプ』の時代<sup>2</sup>の前身に少し深入りすぎたかも知れないが、以上のような一応の流れをおさえておかないと、ちばあきおの野球漫画の革命的な意義を説明しにくいのである。

#### A・1・2 キャプテンの衝撃

ちばあきおの「キャプテン」の第一回が「がんばらなくっちゃ」というタイトルの読み切りとして『別冊少年ジャンプ』<sup>1</sup>に登場したのは、「巨人の星」が完結してちょうど一年後のこと

<sup>1</sup> 一九七二年二月号

であった。

ある日、東京下町の墨谷二中の野球部に二年生の新人谷口タカオが入部した。彼は、野球の名門、青葉学院（私立）からこの学校に転校して来たのだ。レベルが高い青葉学院では、タカオは二軍の補欠にすぎなかったが、墨谷二中の野球部は、青葉から来たと聞いただけで色めきたつ。つい自分の実力を告白しそびれてしまったタカオはやむを得ず野球のことなどなにも知らない大工の父親相手に猛練習を開始する。その甲斐あつて次第に実力をつけていき三年進級をひかえた新オーダー発表のとき、サードで四番というレギュラー・ポジションを与えられたばかりか、キャプテンに任命されたのであった。

（中略）キャプテンの物語は、名門からはみ出るところからはじまるのだ。

「なんてこつたい……せつかくこんどの学校ではのびのび野球を楽しめると思ってたのに……どうすりゃいいんだ。」

青葉の名選手が転校して来たと誤解され、その誤解を必死でことうとして果せず、がつくり帰る道々、空き缶が浮かぶドブ川を見下しながら、谷口タカオはこう<sup>こや</sup>呟く。ストイックな、そしていくらかフアナティック<sup>2</sup>でもあつたスボ根の余韻<sup>よゐん</sup>からまだ自由でなかった読者に、このセリフは一服の清涼感と共に野球マンガの原点がいまなお健在であることを思い出させてくれた。ぼくは、このページから受けたはげしいショックをいまでもよく覚えている。のびのび野球を楽しむために名門に背を向ける、そういう野球漫画もあつたのだ、と改めて思った。

タカオは突然任命されたキャプテンを懸命に辞退する。誤解が原因の過重な期待<sup>こた</sup>に応えるために、精一杯努力した結果選ばれたキャプテンではあつたが、「やったあ！」というふうには喜べない。ちばあきおの漫画では、栄光は、それをめざして必死の努力を傾ける目標ではなく、努力の結果、むこうの方からやってくるものなのだ。「タイトル」にもなったキャプテンは、責任重い栄誉<sup>えいよ</sup>ある座には違いないが、タカオはそれをめざしていたのではない。（中略）

いくら辞退しても、チームメイトに口々に「お願いします」と迫られれば辞退できるものではない。タカオは嬉しさとテレで思わず帽子を口にくわえ、汗をまき散らしながら、「こう呟く。」「とつちゃん、お、おれまた、がんばらなつくちゃん！」その表情が実にいい。過去の努力の苦しさを思い出し、キャプテンの栄誉を深くかみしめて感動するのではない。タカオがかみしめているのは、汗くさい帽子である。

ちばあきおは、涙を描かない。彼が描いたのは飛び散る冷や汗だけだった。

「キャプテン」を読みだすと、いったいなぜそれまでの野球漫画は「血と汗と涙」にああも熱中できたのであろうか、と不思議に思えてくる。（中略）その空想世界は、読者である子どもたちの現実から、あまりにもかけ離れてしまった、とえないだろうか。

ちばあきおの描く野球選手は、読者と等身大であり、読者の見果てぬ夢を奇蹟的に実現する超能力者ではない。読者のように、やりたいことをやりたいようにやって、そのことで自己解放<sup>3</sup>というか自己実現に近づこうとしている、ふつつの少年なのである。彼らにとっては野球は求道<sup>3</sup>の場でも人生のメタファ<sup>3</sup>でもなく、現実的な中学校生活の「部活」であり、広い意味での遊びの世界である。（中略）

したがって、墨谷二中野球部は、名門であつてはならない。のびのび野球を楽しむ場でなくてはならない。監督もコーチも顧問も、子どもをシゴキ、管理するおとなは一人もないほうがいい。タカオを中心とした猛練習の甲斐あつて地区予選の決勝に進出したとき、ようやく学

校中の注目を集めるようになり、校長先生はじめ何人かの先生が練習をようやく見にくる程度がちょうどよいのである。

それに引きかえ、地区予選で対決し、その後宿命のライバルになる名門青葉学院野球部には、選手をあごで使うサングラスをかけたいやみな監督が配置される。タカオが選んだ「のびのび野球」とは、子どもたちだけの野球だったのだ。(中略) 谷口タカオの父は、しょげている息子をはげまそうと、練習相手になってくれるが、野球のことはからきしわからない。(中略) ちはあきおが作品世界に「おとなの倫理」が入りこむのを極力避けようとしたことを示しているだろう。

### A・1・3 野球漫画の新しい方向

月日は流れ、墨谷二中野球部をすばらしく強力なチームにし、事実上全国大会の決勝戦とといわれる対青葉戦を、死闘のすえに打ち破った谷口タカオは、卒業を迎える。彼は墨谷高校に進学して、もちろん野球をつづけることになるのだが、この段階でちはあきおは、タカオと共に読者を高校野球の場に導いていかない。タカオのあとを丸井が、そしてイガラシがキャプテンを継いで、墨谷二中野球部の物語がつづいていく。そして、墨高のタカオの物語は、一九七三年から『週刊少年ジャンプ』誌上で「プレイボール」として、新たに展開されることになった。

こういう分家方式とでもいうべきドラマ展開は、スポ根時代にはあり得ないことだった。栄光への道はつねに一直線だったからだ。連載の分岐という事態にあつて、ぼくたちは改めてちばあきおの主人公観、登場人物観を学ぶことになる。作者は、タカオをほかの墨谷二中のメンバーとは違う特別な存在としては考えてはいないのだ。名門からはみ出してきた少年を、なぜ特別扱いしなければならないのか。それはタカオがいちばん嫌がっていたことではないか。

もし特別視してしまえば、墨谷二中野球部は、ヒーローにとつての栄光への道の入口あたりのちよつとした道草にすぎなくなるだろう。けれども、よく考えてみれば、少年の日々は、たとえ道草に見えようとも、いつだってだれだって、そのときそのとき精一杯自分というものの最先端を生きているのだ。登場人物一人ひとりに行きわたるちはあきおのやさしい目差しは、スポ根ほけのぼくや子どもたちを正気に返してくれたのであった。

さつき、中学時代のタカオの最後の試合、青葉とのたたかいを、ぼくは「死闘」と書いた。書きながら、これは注釈が必要だと思っていたのだが、ちば漫画にも技術とエネルギーを使い果し、傷つき倒れる、という場面はめずらしくない。野球をたのしむというのは、手ぬきやなれあいで野球を「弄ぶ」ことではない。遊びは真剣でなければおもしろくないのだ。しかし、描き方のディテール<sup>4</sup>が、やはりスポ根とは一味違うのである。

試合中にこんな場面がある。先発のイガラシは一年生のことだし、スタミナが心配だったので、タカオは一人黙々とピッチングの練習を積んでいたが、サードを守っているときファール・フライを深追いし、ベンチに転げ落ち、指の爪をはがしてしまふ。控えの選手などいるはずもなく、そのままサードを守りつづけるが、ついにイガラシが疲労困憊、リリーフに立たねばならなくなる。キャッチャーは血染めのボールを黙ってズボンで拭く。ほかに青葉相手に投げられるものはいないのだ。辛うじてダブル・プレーでピンチを切りぬけてベンチに帰ってくるタカオに、「だいじょうぶですか」とイガラシがかけ寄って、思わずタカオの右手にさわると、タカオは「うお……」と叫び、ベンチにうずくまってしまう。

次の三コマ、目をつり上げたイガラシを中心にナインの驚きと緊張の顔がならぶ。「ど、どうしたんだよ」という丸井の疑問に三コマ目でイガラシが答える。「ゆ、指が、おれている……」チームメイトは救急箱と副え木を探しに走る。応急処置を終えてイガラシが言う。「な、なにもこんなにまでして……」

しかし、ちばあきおは闘志で痛みにも耐える谷口の顔をアップにはしない。根性への詠嘆（えいたん）にはない。茫然（ぼうぜん）とするナインと、最後の攻撃に奮起（うんぎ）を促すキャプテンの指示がページ五コマつづき、試合再開である。スコアは9対6。このビハインドを、タカオのバットを折りながらのセンター前ヒットとイガラシの好走塁ではねかえし、墨谷二中は勝利をおさめる。指の骨折をおして投げかつ打つタカオに、悲壮感（ひそうかん）はなかった。少年たちの熱中（ねっしゅう）の前では骨折さえもが相対化されてしまふ。彼らの諦め（あきらめ）を知らないファイトは、未来の栄光のために試練に耐える根性ではないのだ。墨谷二中ナインには「いま」しかない。

「いま」を未来の犠牲としないこと、あと先のことなど考えず「いま」に集中すること、スポーツの楽しさは、まさにここにあったはずなのに、栄光へのコースが設定されてしまったために、「いま」はみんな階段状の試練というプロセスに組みこまれてしまった。このスボ根の限界を、ちばあきおは破ったのである。

丸井キャプテン、イガラシキャプテンとつづいていく墨谷二中野球部は、それぞれの「いま」を熱くさわやかに生きていく。特別の天才ヒーローはでてこないが、個性的な選手が生まれ、育つていく。のびのび野球をたのしむ伝統は、ハード・トレーニングと共に代々伝えられていくのだ。

一方墨高に進学した谷口タカオは、例の指の骨折以来、人差指が伸びずボールが投げられなくなっていた。それで一度はサッカー部に入ったものの、野球をあきらめられず、結局はまた野球部を続けることになるのだが、この墨高の野球部は地区予選の一回戦で毎年敗退している弱いチームだった。

今年の一回戦に代打用員として出してもらえなくなったが、タカオはナインから勝とうという気が全く感じられないのが、不思議でもあり不安でもあった。試合相手のエースが右投げか左投げかも知らず、むろん攻略法など考えてもみない、ただの野球好きの集まりだったのだ。それでもタカオの偵察（ていさつ）ノートとアドバイスのおかげで、バッティングのマトをしぼったり、投手が相手打者の苦手なコーナーをついたりして、善戦する。だが、試合中に人のいいキャプテンは、こう呟く。

「たしかに谷口のアドバイスは適切だ。じつさい効果もでているんだが……。なんかうちのチームにはじっくりこねえんだな。よつするにおれたちゃ、勝ち負けより野球をしてさえいりゃあ満足するんだが、やつには、それだけじゃものたりんらしい。」

「それだけじゃものたりん」のは読者だって同じことだ。けれども、「勝ち負けより野球をしてさえいりゃ満足する」「気持ち忘れてしまっってはならない。草野球として出発をとげた戦後日本の野球の原点はここにある。」「のびのび野球をたのしむ」ことを身上にしていたはずの谷口タカオは、むろん、そのことを知っている。にもかかわらず、「それだけじゃものたりん」のである。

こうして「たのしむ」とはどういうことなのか、そこを掘り下げていくことが、この新しい野球漫画のテーマになる。「キャプテン」時代からのタカオの不屈の闘志が墨高野球部を徐々に変えていくのだが、それはむろん「たのしみ」から求道へあともどりすることではない。ひたすら技術をみがき、個々のプレーを勝利に結びつけていく努力を積み重ねていくのである。ヒッ

トを打つことも、好走塁もファインプレーも、それが勝利をもたらすからこそ、美しいのだし、たのしいのだ。

そのことをタカオは「自分のやり方」として徹底していく。代打でヒットを打ったことから守備にもつくようになったタカオだが、指の故障のため、ノー・バウンドの送球は不可能である。サードをなるべく浅く守り、早いタイミングでボールに飛びつき、一塁ヘワン・バウンドで送球する。学校のグラウンドで、夜の神社で、タカオの特訓はつづく。

地区予選の三回戦で当たることになったのは、シード校の東都実業である。試合の数日前キャプテンはタカオに、こう話しかける。

「おれは、おまえのいっしょうけんめいやろつとする姿は、とてもりっぱだとおもってるよ。しかし、東実に勝とうだなんて考えは、すてるんだな——これは、どう考えてもキャプテンの言うセリフではない。だが、そのつづきはこうだ。

「そりゃ、おれたちだって、おれたちなりの努力をして試合をするつもりさ。でも、おまえは高校野球つてもんをしらんからむりもねえんだろつけど、限度つてもんがあるんだなあ。たとえば東都実業みたいな野球の名門校ともなると、各地から力のあるやつらがぞくぞく集まってくるのよ。しかもその中には、将来野球でメシをくおうなんてやつらがいるんだぜ。そんなやつらとまともにはりあおうなんて、こんなおれたちじゃ、勉強どころかすべてを野球のために犠牲にしなくっちゃ、はじまらんのだよ。まさかおまえだって、将来野球でメシをくおうつてんじゃあるまい。」

これには一理ある。タカオも「わかりました」と答えざるを得ない。けれども、「勝ち負けよりも野球さえやっていりゃ満足」の少年たちが、「将来野球でメシをくおうなんてやつら」に勝つことはぜったい不可能だろうか。そんなはずはない、なにかあるはずだ。ちばあきおは、なんでも許される漫画の荒唐無稽さにも逃げず、精神主義にこり固まりもせず、墨高の現実から出発して、できる限りのことをやってみる。作者は「のびのび野球をたのしむ」側の少年たちの立場に立ちきろつとしたのだった。

少しでもはやいワン・バウンドの送球技術を身につけようとひたすら練習に打ちこむタカオの相手をするうち、内野手のバウンド処理はめきめき上達する。しかもノー・バウンド送球に切りかえたタカオは、曲がった指を使わずにボールをはさむようにして投げるうち、フォークボールのこつを掴むことにもなる。タカオ一人、東実相手に「実力をためす」はずだった試合は、墨高一丸となつての猛反撃に結実していく。その結果は――。

野球をたのしむというのは、野球の中に自分の全てを投入することだ。投入した結果が納得できればそれでいい。できなかったら、未来のためにではなく、「いま」の腐蝕をくいとめるために、よりいっそう深く没入していかねばならない。そのようなわれを忘れる熱中こそが、不可能を可能にする。エリートでなくても、ヒーローでなくても、だれだって自分の好きなことを本気でたのしもうとすれば、そこに道が拓ける。

スボ根の彼方に、ちばあきおはそういう野球漫画の新しい方向を示したのであった。

## A・2 イチロー『キャプテン』を語る

大リーグに移籍し活躍めざましいイチロー選手が『キャプテン』を語っていた。今を感じる意味でこの文を紹介しておきましょう。

―小学生の頃、僕はこのマンガに感動し、そして夢中でした。―

イチロー（本名・鈴木一朗）

感動したマンガは？ という質問に、イチローが間髪いれずに答えたのは、ごくありふれた野球少年たちが主人公の不朽の名作だった。そう、我々も好きだった、あのマンガ――考えてみれば、イチローは初めからイチローだったのではない。今やメジャーで首位打者を争う彼も、最初は我々とさして変わらない、ひとりの野球少年だったのだ。

（取材・文 石田雄太）

「小学生の頃、僕はこのマンガに感動し、そして夢中でした。」 『キャプテン』。

すでに亡くなられた漫画家、ちばあきおさんが描いた、野球マンガの名作である。ごくありふれた野球部に所属する普通の中学生が、努力に努力を重ねて、名門の野球部に挑むというストーリー。墨谷二中のキャプテンを4代に渡って描く、長編マンガだ。

「僕が『キャプテン』を初めて知ったのは、小学生の時かな。何しろ、友達に見せたら、野球部に入るって言い出したほどでしたからね。僕はコミックスではなくて、アニメで見たんですけど、感動しましたね。最初に見たのは、谷口キャプテンの時代でした」

野球の名門・青葉学院中で二軍の補欠だった主人公、谷口タカオは、東京の下町にある墨谷二中への転校を機に、楽しんで野球をやりたいと野球部の門を叩いた。しかし初練習の時、不覚にも青葉のユニフォームを着てしまったことから誤解を生んでしまい、墨谷の全校生徒から「青葉のレギュラーでサード」という過度な期待をかけられてしまう。口下手の谷口は真実を告げられずに思い悩むものの、猛練習を開始した。それなら練習をして、青葉のレギュラーと同じくらい野球がうまくなればいいじゃないか、と――。

やがて、谷口はその努力を認められて、3年生になると同時に4番でサード、しかもキャプテンに指名された。

「キャプテンになった谷口が、チームのみんなに対して猛特訓をするシーンがあるんですよ。でも、自分はグラウンドではみんなにノックするだけで、特訓を受けることはない。だからナインに不満がたまつて、ピッチャーの松下が、キャプテンに抗議しようぜ、と言い出すんです。もちろんイガラシだけは、そんなことするなんてバカじゃねえの、みたいなこと言ってるんですよ。で、谷口の家に行ってみると、谷口のお母ちゃんが出てきて、神社に行っていると言っみんなは、どうせ青葉学院に勝てますようにって願かけにでも行ってるんじゃないかって言うんだけど、実は谷口は、みんなのノックに追われて自分の練習ができないからと、それよりも厳しい猛特訓を神社でやっていたんですよ。その姿を物陰から見つけたナインが、申し訳なかつ

たという気持ちになって一人、また一人と、走って帰る。それをさらに物陰から見ているイガラシが、これなんだなあ、キャプテンがみんなを引っ張る力は……と独り言をつぶやく。そういう見えないところの姿というのは、グラウンドの上で何かを示すよりもはるかに強い影響をチームに与えてくれますよね。僕にとっても、そうかと思わせてくれる場面がたくさんあったから、このマンガに夢中になっていたんだと思います。僕なら抗議の仲間には加わらずにイガラシのようにこっそり見に行つて、でも独り言はつぶやかないで（笑）、イガラシと同じことを思ったでしょうね」

イチローが言う『松下』というのは、墨谷二中の背番号1。プライドは高いが投げるボールは遅く、弱小野球部の典型的な3年生エースだ。そして『イガラシ』とは、墨谷に入ってきた新入部員で、イチローがもっとも心惹かれるキャラクターである。体は小さく、見てくれはサルのようなイガラシは、シャープなバツティングで先輩達の度肝を抜く。さらに内野を守らせてみたらこれが抜群で、間違いなくレギュラー級の実力を持つ。しかし、谷口は悩んだ。墨谷には、新入部員には中学野球のイロハを教えるために秋まではメンバーに入れないという不文律があったからだ。しかもイガラシは思ったことを口にしてしまい、その態度が先輩の反感を買ってしまっていた。

「みんな個性があつて、それぞれ面白いんですけど、自分に近いなと思うのはイガラシですね。顔も似てるし、上級生に対する生意気なところなんているのも、僕と同じですから（笑）。僕も、小学校の3年生になってからじゃないと出られない試合に、小学校1年生の時から名前を変えて出ていましたからね。名前がそのままだとバレちゃうから、上級生の名前を使って出ていましたよ、その試合に」

「昔、青葉学院みたいなチームに震え上がったことがあります」

イチローが中学生の時。鈴木一朗というピッチャーを擁した愛知県の豊山中も、青葉のような強豪校だった。

「全国大会の、ベスト4までいきました。小学校時代、全国大会のベスト8まで行ったチームのメンバーが、ごそつと来ていましたから。特にセンターラインがすごく優秀だったんです。キャッチャー、ショート、センター、まあ、ピッチャーは僕でしたけど、このセンターラインがものすごく優秀な選手ばかりで、最初からある程度、期待のできるチームでした。ですから、どちらかと言えば、墨谷二中ではなくて青葉学院の方でしたね（笑）。でも墨谷に成長していくプロセスは、青葉学院の選手が見せられても感動するはずですよ。だった名門のチームにいる選手だって、最初からうまいわけじゃないですからね、みんな」

それでも、豊山中は、全国大会の準決勝で敗れてしまう。

「僕らにとつての青葉学院みたいな、驚くような強さのチームもありましたよ。全国大会の最後に負けた兵庫県の中学校だったんですけど、これはスゴイチームでしたね。僕が中学でピッチャーをやっていた頃は、同じ中学生を相手に打たれることなんてことはほとんどなかったんですよ。それがその兵庫の中学には、1番から9番まで全員、芯に当てられた。それはもう、あの打線のイメージは強烈でした。みんなに芯を食らって、打ち取ったと思つても、ライナーとか、いい当たりばかりでしたからな。メチャクチャ驚きました。で、ピッチャーが2年生

で……そういう意味じゃ、佐野と同じですね。佐野は左で、彼は右でしたけれど、やっぱり青葉だな、あの学校は（笑）。それでも、結局はあの中学から甲子園に出たようなヤツはいなかったんですよ。僕、出来る範囲の中で調べたんです。でも誰の名前も見つけられなかった。あの大会は彼らが優勝したんですけど、すごいチームだった。ホント、震え上がりましたよ（笑）

ふと、思った、愛知県の一中学生だった鈴木一朗は、今、メジャーリーグの押しも押されぬスーパースター、イチローに成長した。そのプロセスの中で、墨谷二中の谷口がそうだったように、鈴木一朗も凄まじい努力を重ねてきたに違いはない。だからこそ『キャプテン』に思い入れているのだ、と。『キャプテン』に夢中になっていた当時のイチローは、今と何が違い、何が変わらないままなのだろう。

「僕は中学生の時、初めて監督という存在に出会ったんですけど、学校の監督というのは自分の形にはめたがるというイメージがあって、あの頃は何を言われても聞かなかったんです。でも今は、まず聞く自分がある。しかも、それをさらに振り分ける自分もいます。そこは全然違いますね。同じところは……納得のいかない理由で何かを言われると、すぐに歯向かうところですかね。相手に食ってかかるところはあの頃と変わっていない……何せ、イガラシですからね（苦笑）」

（出典 プレイボーイ 第37巻 第34号 2002年9月17日 集英社発行）

### A・3 「原作者 ちばあきお」について

キャプテンの原作者ちばあきおについて簡単に紹介しておこう。

本名・千葉亜喜生。昭和十八年（一九四三年）満州・奉天（現在の中国・遼寧省瀋陽）生まれ。昭和四十二年『サブとチビ』（なかよし）でデビュー。昭和五十二年『キャプテン』『プレイボール』で第二十二回小学館漫画賞を受賞。最後の作品となった「チャンプ」<sup>5</sup>を連載中、昭和五十九年没。享年四十一歳。

### A・4 あとがき

何を思ったのか谷口キャプテンの話を本にしてみました。ちょっとした道德の資料を作ろうとしたのだが、なんとなく中途半端な気持ちが出てとりあえず谷口君の墨谷二中でのキャプテンの場面だけを文字にしてみました。

自分がキャプテンを読んで涙した場面の印象がわすれられない、この感動をいまの子どもたちに伝えたい。マンガはマンガでもしろいがたくさんの人に伝えるのはなかなかできない。ましてや教室でその感動を伝えようとするのはなみだいていことではできない。そのためには文章にするのが一番いい。文章に大切な漫画のコマをはりつければ充分に原作者の意図は通じるのではないだろうか。またそうしておけばいつでも好きなときに子どもたちに紹介ができる。

今の時代の中に百年立つても生き続けているものがあるだろうか？ 情報社会といわれてから久しいが、科学技術が日進月歩で進化している中で百年後の世界に何が残っているのだろうか。わたしは思っている。感動を伝えたい！「キャプテン」の感動は百年後にも必ず通用する。作品自体はもちろんフィクションだがその中には人にできないことは何一つ描かれていない。そつ誰もが谷口君になることができるのである。谷口君の好きな野球のタマをサッカーボールに置き換えればそこにはサッカーが大好きな谷口君がでかあがるのである。そう野球のタマを君が今打ち込んでいるものに変えるだけで君はちばあきおの描く谷口君になれるのである。

おざわしげまさ  
小澤茂昌